第 6 回　民博若手研究会　記録

実施日時：2013 年 11 月 24 日（日）　午前 11 時から午後 5 時
場所：第 2 セミナー室
出席者：浅川、足立、大川、奈倉、比留間、山田、渡会
記録：奈倉

１．発表者１：山田　香織（香川大学）
タイトル：ドイツにおける二つの時代の「帰還」現象と故郷認識

【内容】

本発表は、ドイツにおける第二次世界大戦終結直後に東欧地域から強制追放されたドイツ人（被追放民／ハイマートフェアトリーベネ）と、これ以降に東欧からドイツへ移住した「ドイツ人」（アウスズィードラー、シュペートアウスズィードラー）を対象とし、それらが生じる歴史的背景の整理を踏まえ、帰還後の彼らの生活世界を描写・考察した。

被追放民という語は、法的に範疇化された概念である。発表者の聞き取りによると、彼らは出生地や祖先の故郷に対する関心が強く、自分たちのルーツを確認したり、歴史を共有したりする組織や活動を積極的に行っている。例えば、同郷会の活動、「ズデーテンドイツの家」の建設、そしてミュンヘン市内に博物館建設を予定していること等が挙げられる。ルーツに対する関心は、そこに直接的生活経験のない第二世代にも見られる。

一方、アウスズィードラー、シュペートアウスズィードラー（後者は 1993 年 1 月以降にドイツへ入国した人々）は、被追放民ほど、元移住先に対する愛着は強くない。彼らは、旧ソ連邦をはじめとする中東欧へ移住したドイツ人の子孫であり、当該地においてドイツ人としてカテゴライズされていた。本発表で焦点をあてた旧ソ連圏からの帰還者は、ドイツへ移住後も日常生活の中では旧ソ連邦での文化（習俗・食・言語など）を実践している。つまり、彼らにとっての「ドイツ文化」とは、「ロシア的ドイツ文化」の性格が色濃い。

両者のドイツ語能力の差についても言及された。被追放民は元移住先でドイツ語を使用していたので帰還後も日常生活に支障がないが、アウスズィードラー、シュペートアウスズィードラーはドイツ語のレベルが低く、それが社会的適応に影響を与えている。

今後は、移住後の滞在年数の相違による国家・場所に対する認識の相違に留意しながら調査研究を続けていきたいと述べられた。

【質疑応答・コメント】

・博物館について。今後のプロセスに注意。表象したいものはなにか。
・語彙の整理について。分析概念としてどういう言葉を用いるか？「帰還ドイツ人」（強制とシュペード…）としたらどうか。
・ナチスドイツの敗戦で領土が大幅に削減させられた。1945 年から 10 年くらいに戻って

来た人が「被追放者」。そこに残留していた人がその後戻って来た人がアウスズィードラー、1993 年以降の人がシュペード。日本の引揚げに通じるものもある。
・1951 年の難民条約と似ている。（第一条の（２））
・ドイツ系のために迫害を受けていたひとたち（アウスズィードラー）。
・カザフスタンの事例について。必ずしもナチスドイツ領と直結しているわけではないのでは？
・故郷認識は「故郷」としないといけないのでは？被追放者の第二世代は直接的経験のない場所、出生地ではない場所。故郷というよりも「ルーツ」探し。
・日本の引揚げは、敗戦の経験があるので語れない苦悩がある。彼らはどうか？→今の段階では語る。被害者意識はある。
・帰還後の生活世界を考える上で、階層の問題を考えないといけない。「…系ドイツ人」といった、どこから戻ってきたかによって階層化されている面はないのか？経済レベルは？遅く帰ってきたほうが下といった関係はあるのか？
・日系ブラジル人の生活世界の語り方と似ている。その土地で成功したことを語ろうとする。（他の事例との共通項）
・両者が何かのアソシエーションでともに活動することはあるのか？→ないと思う。
・自己表現の仕方にも共通項がある。歌・音楽。
・ハーフはいないのか？彼らの今後はどうなるか？→Ｄの事例。
・ユダヤ人も入る。カザフはムスリムだが通婚するのか？→Ｄはギリシャ正教。宗教的側面に留意。
・ドイツ語のレベルはどうか→1990-96 年の間にドイツに来た人のレベルは低い。

２．発表者２：比留間　洋一（静岡県立大学）

タイトル：在日ベトナム難民の新しい物語－「二世」にとっての「故郷」をめぐって

【内容】

従来の日本に居住するベトナム難民に関する研究は、一世を対象にしたものが多数で、二世についての調査研究は十分に行われているとは言えない。このようなこれまでの在日ベトナム難民研究踏まえ、本発表では、在日ベトナム難民二世のラップ歌手―「ＭＣナム」のエンターテイメントの調査を基に、故郷が議論された。

ＭＣナムのラップによる表現活動がどのように故郷を表現しているのだろうか。発表者は、彼の歌う歌詞を分析するなかで、「長田」、「神戸」、「ベンチェ」（ベトナム）といった多く地名が出てくることに気付いた。彼の人生の歩み、それぞれの場所での生活環境と突き合わせながら、「どっちで暮らすか？」と葛藤する心の痛みが描写される。彼の歌うラップには、日本での生活の喜び、苦痛、そして生きた証を残したいという願いが込められている。彼ら二世の「新しい物語」が始まったが、当事者は「どうやって次にいったらいいのか？」と人生を模索している新たな苦悩も抱えている。

今後はMCナムの事例研究を通して、「底辺」からの文化運動、長田における在日コリアンとの共生、「在日」の文化活動等の問題群と対話していきたいと報告された。

【質疑応答・コメント】

・日本でどっちつかずの者同士（在日）の横のつながりもみられた。
・「帰還」とは言い難い？
・「生きた証」、カミングアウトという性格。
・MCラムは化粧品販売をしているが、今後どうしたいと思っているのか。今のままでいいのか？日本でラップが流行らなくなっているので、見通しは厳しいのでは？多文化共生系のイベントでしか受けがよくないのでは？
・彼の音楽が在日ベトナム人の間でどのくらい受け入れられているのか？イシさんによると、日系ブラジル人の「天才MC」は、日系ブラジル人の間では受け入れられていない。
・MCさんは夜間中学中退。二世の人の教育状況は？社会的に成功した人たちからはどう思われているのか？階層は？彼の事例を一般化できるか？
・日本語能力の差が影響しているのでは？学習思考言語能力の差？
・日本に定住することが前提なのか？
・帰るつもりでいるのか、というところと関連して、最後の歌詞に「ベトナムに帰る」と言っているが、あれは笑いをとるためか？カミングアウトなのか？少しずつ留学期間が延びているところからみると、ベトナムへの関心が強まっているよう。
・2010 年に帰化しているが、その時の心境は？→難民パスポート（難民旅行証明書）が不便なので子どものために、2000 年以降取得する人が増えてきた。MCナムのお母さんは支援活動などもしているエリート的存在。生活保護を受けていない。受けていると帰化できない。
・国籍とアイデンティティは関係ないだろう。
・「底辺」からの文化運動と言っているが、「文化」なのか？ラップは異議申し立て。MCナムは政府への申し立てではない。いわゆる黒人系のラップとは異なる。歌詞においては文化運動的ファクターが弱いのでは？
・「ベトナム難民」。exile と refugee。サイードは exile と同定している。中途半端な状態にある人。二世は法的には refugee とはいえない。「日本生まれの外国人」。
・Malkki：難民の人類学的研究。
・二世の抱えている問題は伝わる。
・在日コリアンとの違いは？政治とのかかわり。母国の経済発展の面で異なる。見た目は？ベトナムの場合は通名にしても外見でわかる人もいるのではないか？
・日本社会でうまくいかなったので「ベトナム」を見出していこうとしているのでは？
もしうまくいっていたらここまでやっていなかったのでは？
・歌詞をみていると強烈な印象。歌にしたいと思ったときに、ベトナムだったのか？故郷

を問いていくことの意味は？

３．発表者３：奈倉　京子（静岡県立大学）

タイトル：中国系移民の複合的な「ホーム」―あるミャンマー帰国華僑女性のライフヒストリーを事例として

【内容】

本発表は、1969 年にミャンマーから中国へ「帰還」した帰国華僑女性とその家族のライフヒストリーをもとに、ある特定の土地に所属意識を見出すことができず、土地と所属意識の結びつきから抜け落ちる人の「ホーム」について考察された。

1949 年の中華人民共和国の成立、ミャンマーで 1956 年あたりから激化する華僑の排斥、中国で起きた文化大革命、中国の改革・開放政策、そして近年のミャンマーの民主化といった、ミャンマー華人・帰国華僑の人生を左右してきたいくつかの歴史的出来事がある。このような当事者を取り巻く 20 世紀の出来事を背景に、彼女が出身地、帰国後に経験したことを追いながら、元居住国、そして「祖国」中国への認識のゆらぎを描き出した。

インフォーマントの語りから、国家レベルと生活経験のある特定の場所レベルの複数のレベルで語られる複合的な「ホーム」像が浮かび上がってきた。これらの場所に対し、直接的経験の有無や長さだけでなく、そこで自己実現できたかどうか、共通の記憶・経験を有する人がいるかどうかという、自分とのつながりの親密さに関わる要因が「ホーム」としての場所の意味づけに影響を与えていることがわかった。つまり、つながりの複合性が創り出す「ホーム」の中に生きているのである。

【質疑応答・コメント】

・宗族の原理が働いているのではないだろうか。

・族譜は編纂されているか。→ミャンマーに渡った世代を第一世代として編纂し始めている。

・「つながり」とは家族・個人レベルだけなのか？→国家レベルのつながりも視野に入れている。

・クリフォードの「ルーツ」を想起させる。「経路」と「根」の両方の意味。

・自己実現できたかどうかによってある場所に対する評価は左右させる。インフォーマントがもし中国で進学し、学校の先生になるという夢を実現させることができていたら中国に対する「ホーム」意識は強くなっていたかもしれない。

・語りは変わるので、危うさがある。インフォーマントの認識（主観性）だけを追い求めても正解かどうかわからない。実践と結びつけて、客観的事実と結びつけて解釈していく必要がある。